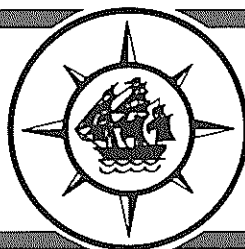


Operation Raleigh News

Operation
Raleigh

DENSO

No.9

昭和60年(1985)6月5日水
毎月1回発行●発行所 オペレーション・ローリー日本委員会
〒104 東京都中央区築地1-7-10 築地オーモビル502号
電話 東京(03)544-7413

●このオペレーション・ローリーニュースは日本電装㈱のご協力で制作されたものです。

応募者数1,000名を突破

1985年次参加者募集締め切る

1985年次オペレーション・ローリー日本代表派遣青年公開募集活動は3月20日から5月31日まで約70日間にわたって行なわれましたが、新聞、雑誌、テレビなどでの紹介や募集告知広告によって、ORJC事務局には、ハガキや電話での募集要項請求が毎日のように到着しました。多い日には一日100通を越える請求があり、事務局はその対応におおわらわでした。

5月31日の時点での事務局の集計によると、募集要項請求者総数は昨年の3,070件を上回り、4,200件を越えています。

また、応募者数も昨年実績の534名をはるかに突破し、1,049名(6月5日現在)に達しました。

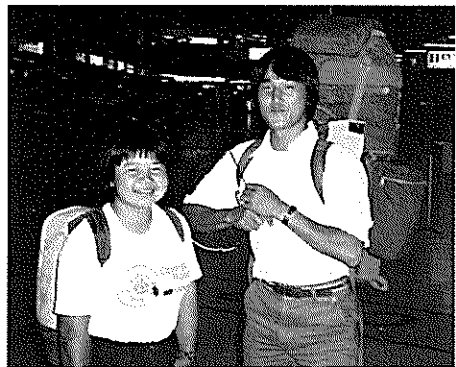
とくに締め切り間際に応募が殺到したため、事務局でははてんてご舞い

の忙しさと、正確な集計はもう少し時間がかかりそうです。全体の傾向としては、男性の応募が多いものの、女性の応募も予想以上です。

なお第1次合格者は、厳正な審査のうえ、6月20日に正式発表される予定で、合格者は東京と大阪で行なわれる第2次審査(体力、泳力)に臨むことになっています。

前橋さん・山内君帰国

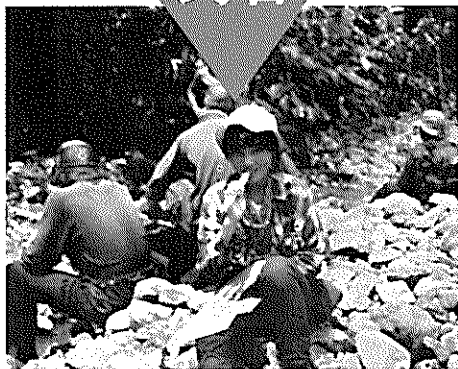
コスタリカフェイズに参加していた前橋宏美さん、山内泰胤君が5月30日16時15分成田空港着の日本航空061便で元気に帰国しました。2人は5月中旬に現地での活動を終了したあと、グアテマラなど中米諸国を旅行してきたということです。



●元気に帰国した前橋さんと山内君(成田空港)

パナマから
現地写真

到着



▲川原で休憩中の岸田さん

パナマフェイズの金鉱さがし・カヌー探検班に参加している岸田直子さん、筒井正幸君からナマナましい未現像フィルムが送られてきました。残念なことにカメラが水没したため、仕上り状態はよくありませんが、現

地の様子はわかると思います。この撮影のあと、渡河中にカメラを流失してしまったということです。最新のたよりでは、筒井君が一時発熱しましたが、全快し元気に活動を続けている模様です。

▲仲間たちと記念撮影
(筒井君が撮影したと思われる)

ロープをつたって川を渡る▶



▶砂金さがし



英国本部からのレポート

バハマでの成功を発表



OR英国本部から探検フェイズにおける最新レポートが届きました。その要約は以下の通りです。

われわれの舞台は中米に移っており、コスタリカ、ベリゼ、ホンジュラス、パナマで科学的リサーチや共同作業を続けています。これに先立ったバハマ諸島における活動は3月6日に終了しました。17才から24才までの多種多様な国籍をもつ若者たちは、お互いの意思の疎通をはかることを学ぶだけではなく、科学的リサーチに参加することで社会に貢献することを学びました。バハマ諸島での主要プロジェクトはダイビングでしたが、ほとんどの参加青年は、ダイビングをある程度マスターしました。

SWR号はORの作戦本部としての役割を果たしています。船内には科学研究室が2つあり、さまざまな研究に役立っています。バハマ諸島での活動概要は次の通りです。

● グランドバハマ

- ルカヤン国立公園の建設（小道や階段など通路の整備など）。
- “子供の家”にアドベンチャープレイランドを建設。
- 魚類養殖プロジェクトの手伝い。
- 海草分布調査。
- 人間の磁気感知力調査。
- 広範囲なダイビング訓練とサンゴ礁観察調査。
- カナダ人が開発した透明樹脂製潜水器「Sub Igloo」の設置。

● ニュープロビデンス

・ ナッソーで最古の植民地時代の住居を再建。これはバハマ・ナショナルトラストの本部となった。

● キャット島・グレートイナグア島

海底に沈下したほら穴（ブルーホール）へのダイビングにより、生物学的調査。新種の甲殻類発見の可能性がある。

・ 陸ガメ保護のための調査および保護柵の修理。

● キャット島・ミドルカICOS島

・ 洞窟の中のコウモリや昆虫の科学調査。

野生生物調査など インカ地方の徒歩旅行も

OR英国本部からこのほどペルーとボリビアでの活動計画書が送られてきました。ペルーフェイズには、日本から原田亜紀子さん、細田香納美さん、石本一鶴君、大塚洋君の4人が参加します。またボリビアフェイズには菊地孝範君、新保陽子さんの2人が参加することになっています。いずれも日程は7月中旬～9月下旬の予定です。

ペルーフェイズ

[科学活動]

- タンボパタ保護区の野生生物調査
- ・ 礁湖のカイマン（ワニ）やサル、鳥類のリストづくり。
- ・ 腐肉を食べる鳥類の観察・研究。

- ・ 陸ガメの調査・研究。
- ・ 草食性昆虫の調査・研究。
- ・ 薬草の分析と研究。
- ・ 植物群・動物群の栄養学的調査。

[奉仕活動]

- タンボパタ国立公園の整備
- ・ 鳥や昆虫研究のための施設づくり。
- ・ 村に水ポンプを設置。
- ・ 地形調査と地図作製。
- ・ 橋、歩道、階段などの保存・整備。
- ビルカバンバ山脈
- ・ 今後の探検用にガイドブックを書きなおすための調査。
- ・ 高地の村に水ポンプ設置。

[冒険活動]

- 地図にのっていない河川の探検。
- いかだによる川下り。
- インカでの10日間のトレッキング。

ペルー・ボリビア



ボリビアフェイズ

[科学活動]

- 絶滅が懸念されているメガネグマの生息数調査をアンボロ国立公園で行なう。
- 鳥類学プロジェクト。
- 野生動植物のリストづくり。
- 陸ガメの生息数調査。

[奉仕活動]

- 洗面所や公衆トイレの建設。
- 公園看視小屋の建設。
- 公園内に立札（サイン）を立てる。
- この地方の人々のための診療所を開設する。

[冒険活動]

- アンボロ山をボリビア山岳クラブ員と登はん。
- 同じくサバイバル体験をする。



オペレーション・ローリー&日本電装

ヨットパーカーとTシャツプレゼント

ORJC事務局が日本電装の協力で制作したオリジナルヨットパーカーとTシャツをプレゼントする企画が、週刊プレイボーイ(4月16日号)とナンバー(5月20日号)で実施さ

れました。プレイボーイは、ヨットパーカーを10名にプレゼントするもので、350名ほどの応募がありました。またナンバーは、Tシャツを10名にプレゼントするもので450名ほどの応募がありました。いずれも厳



正抽せんのうち、当選者にヨットパーカー、Tシャツが発送されました。

マスコミも「募集」を掲載

1985年次派遣青年募集は5月末で締切られましたが、募集開始からこれまでに新聞、雑誌、テレビ、ラジオなど多くのマスコミで紹介されました。主なものは次のとおりです。

- 新聞/朝日・日経・読売・毎日・サンケイ・中国・静岡・福井・福島民報・福島民友・信濃毎日・熊本日日・北日本・高知・日本海・佐賀・埼玉・岐阜日日・岩手日報ほか
- 雑誌/平凡パンチ・セイルほか
- テレビ/NTV・THK・CBC・CTVほか

ここに、2ヵ月半にわたる旅の反省をしてみたい。

第1に、持ち物について。ジョイニング・インストラクションを参考に荷作りをしたのだが、不必要なものも多かった。私たちのフェイズは、船に荷物を置くことができるためか他の国の人たちも大きなバッグを持ってきていた。しかし、衣類は汚れたら洗濯すればよいし、現地でトレーナーを購入したり、スポンサーからTシャツなどが配られる。従って極力最低限にとどめるべきである。礼服については、持参したスーツは一度も着る機会がなかった。むしろパーティーやレセプション用に、ふわりとした軽ドレスや着物を持っていくとよいと思う。

逆に、持っていけばよかったと思うのは、星に関する本、歌の本、5円玉。澄んだ空気の中の無数の星。口々に、あの星は何だろうと言いあうのだが、わかったのは北斗七星やオリオン座など数個のみ。一つ一つの星を指さしながら、それらにまつわる伝説を語り合うのも楽しいことと思う。5円玉は、穴のあいたコインを持たない国の人々に、非常に珍しがられた。

第2に、日本に関すること。SWR号には日本電装から贈られた碁があったが、私たちは3人ともうち方を知らず、使わずじまいだったのは残念だった。柔道、空手などに興味を示す人も多かったが、太極拳と混同している者もいた。これから出かける人は、ぜひ碁をマスターし、柔道などを教えてあげてください。日本の政治、経済、社会的情勢に関し、

OR参加青年 リレー・レポート 《第2回》



しっかり目的持ち 積極的に参加を

1984年次第2陣 伊藤由樹子

かなり詳しく訊ねられることも、しばしば。中には日本にいる時には当然と考えていたことや、漠然とイメージしかもっていなかったことを問われて、ハッとすることもあった。日本について詳細に書かれている本を持っていただければ役立っていただろう。他の国のことを知るだけでなく、離れた所から、広い角度で日本を見つめることのできるチャンスである。

第3に、外国についての知識。何も調べないで行けば、先入観もなく新鮮な印象を得られるという意見もある。しかし、予め、ある程度の知識を持っていれば、話も深まるし、



寄港地での過ごし方もより積極的になる。(各寄港地では、上陸して自由に行動できる時間がある)ただ、その時注意しなければならないことは、日本で抱いていたイメージに固執せず、そのイメージと現実とのギャップに対し柔軟性を持たねばならないことである。あるイギリス人は最初遠慮がちに私にたいへん気を使っていた。話していくと、「日本人はヨーロッパ人を汚ないと思っている」と思い込んでいたという。一方「日本人は数学ができる」というステレオタイプな考え方をもっていたアメリカ人。数学に弱い私と会って呆れていたのではないだろうか。

さて、最大の反省点は、積極性についてである。私たちのフェイズでは、大西洋横断中はデューティに励み、バハマでのプロジェクトも資材がなかなか到着せず、18人のベンチャーの間には不満も多かった。しかし、あの時、自分たちで積極的に個人的な、あるいは集団的なプロジェクトを考えだしていたら、さらに充実したのではないだろうか。バハマでは、ベースキャンプから離れ、ディレクティング・スタッフもいなかったが、仕事を与えられるのを待っていた雰囲気があったようだ(実際に、バハマで何をしたいかと訊ねると「課せられた仕事」と答えた人も数人いた)。オペレーション・ローリーは若者に様々な機会を与えてくれるものだが、規模が大きく進行が滞ることもある。その中で、一人一人はしっかりと目的を持ち、積極的に、協力を惜しまないことが必要である。

日本代表派遣青年のページ

炎熱のパナマ・フェイズ

悪戦苦闘のジャングル生活

猛暑のパナマで活躍中の岸田直子さん、平野裕加里さん、川村豊君、筒井正幸君からの便り(抜粋)をご紹介します。

〔岸田さん〕やたら忙しい分刻みの生活です。現在コロンの近くの城跡の中のベースキャンプにいます。私たち4人組は、いろいろな失敗を重ねつつも日毎にたくましくなっています。とくにジャングル訓練では悪戦苦闘の連続。しかし、顔は現地の人と見分けられないほど真黒になってきました。

〔平野さん〕私たちはハッキリいって軍隊生活をしています。食事はまずいし、水やジュースでおなかを膨らませています。幅100mの渡河訓練や泥のジャングル行進で毎日クタクタ。でも、英語のジョークの意味がわからなくても、楽しく笑っています。



首までつかって川を渡る(写真はバハマフェイズ)

〔川村君〕ジャングルで2日間野営をしました。食事はお湯を注ぐだけのアーミー食。でも、きょうはバーベキュー・パーティーで久しぶりにまともなものにありつけそうです。

〔筒井君〕4月19日と20日に2班に分れて、カレドニア湾にきているSWR号に乗り込みます。レセプションには、川村君を除いて3人が参加することになりました。

この後、5月中旬に届いた手紙では、4人とも元気な様子ですが、他の参加青年のうち2人が6~7cmもあるオオアリに噛まれ、意識不明になるほどの事故があったということです。またサンドフライという微

小な虫が蚊帳のなかに入ってきて、これにさされると天然痘になったように皮膚が腫れるそうです。

5月からは、班分けが行なわれ、川村君はダイビング班、平野さんは医療手伝い班、筒井君と岸田さんは金鉱さがし・カヌー探検班で活動することになったということです。

コスタリカ便り

コスタリカに派遣されていた前橋宏美さんからの連絡によると、約2ヵ月のジャングル・キャンプ生活が終り、4月中旬にはホリデーキャンプで青い海、白い砂浜にかこまれ、シュノーケルを楽しんだということです。4月17日にはSWR号がリモン港に入り、船内パーティーに参加したそうです。4月下旬にはホリデーキャンプも引きあげ、5月12日以降はORと離れ、山内君とともに2

週間ほどグアテマラなどに滞在、5月末に帰国の予定だということです。

ホンジュラス便り

ホンジュラス派遣組の勝間靖君、今田恒夫君、田中正信君、谷川秀夫君の4人について、勝間君はつぎのようにレポートしてきました。これは5月初旬に届いた便りです。

現在4人はラ・シーバの東、パラシオスというラグーン地帯のベースキャンプにいます。ここから2班に分かれ、ブラック・リバーを上流へ移動しながら活動します。これまでの経過はつぎのとおりです。

- 4/2 マイアミ泊、英国、香港、オマーンの参加者と合流
- 4/4 ジャングルトレーニング
} サバイバルのためのレクチャーを受ける
- 4/8 自由行動
- 4/9 SWR号に乗船
- 4/10 ホンジュラスでSWR号の
} 荷降ろしや荷積みなど荷役作業に従事する
- 4/13 ベースキャンプの設置作業
} に従事する
- 15

バハマ体験レポート

大見則親

1984年12月中旬から約3ヵ月間、OR第3陣としてバハマフェイズに参加した大見則親君(写真)の報告をご紹介します。

——ORをどう評価するか
僕の冒険イメージとは少し違っていたが振返ってみると偉大なプロジェクトに参加したという思いが強い。

——一番印象的なプロジェクトは
ナショナルトラストプロジェクト。自然に恵まれたバハマの人々には関心の薄いものかも知れないが、今回の活動によって、少しは目が向けられるようになると思う。

——一番楽しかったことは
バハマの女子学生の質問攻めにあったこと。また、陽気なバハマ人に会えたこと。ドイツ系の米国人の家に招待されたことも楽しい思い出。

——参加前にぜひやっておくべきことは
何でも、ライセンスを取っておくこ



と。経歴が重視されるから、やったことがあると答えたほうが、おもしろいプロジェクトに参加できる。

——日本人と外国人との違いは
英国人はORのようなスケールの大きなことを実行している点です。おもしろいと思ったが、やや保守的だ。その点豪州人やカナダ人は知識吸収意欲が旺盛だと感じた。日本人的な考え方は、まだ西洋人には十分理解されていないように思った。